

平成30年1月21日(日)

みのやま 美濃山遺跡(第7次調査) 現地説明会資料

調査場所 八幡市美濃山出島地内

調査期間 平成29年4月18日～平成30年2月下旬(予定)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3
URL <http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

1. はじめに

美濃山遺跡は八幡市南部の標高約52mの丘陵上にある遺跡です。北東には、美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡が隣接しています。

新名神高速道路整備事業に伴い、平成27年度から発掘調査を実施してきました。今回の調査では、弥生時代後期の^{たてあなたてもの}竪穴建物、古墳時代後期の^{ほったてばしらたてもの}竪穴建物や奈良時代の^{しょうどこう}掘立柱建物、壁面や底面が火を受けて赤く焼けた焼土坑を検出し、複数の時期に営まれた集落遺跡であることがわかりました。

2. 調査の成果

弥生時代 過去3年にわたる新名神高速道路整備事業に伴う調査で、竪穴建物10基と土坑、谷地形などを確認しました。

丘陵の西側には小さな谷があり、地形が低くなっているため、竪穴建物は調査地の東側の高い位置に分布しています。

今回の調査では、竪穴建物5基を調査しました。竪穴建物は方形・円形に竪穴を数十cm掘り下げて屋根をかけた半地下式の住居をいいます。床面上では^{しゅうへきこう ちゅうけつ}周壁溝と柱穴を検出しました。周壁溝は床面の壁際に沿って掘られた溝で、竪穴の壁を保護するための板材が立てられたもの、もしくは屋内の水を集めるための溝と考えられています。今回の調査では、板材を埋設した痕跡は認められず、周壁溝から屋外に向けて溝が掘られていたことから、住居内の雨水や湧水を排水するために掘られたものと推測されま

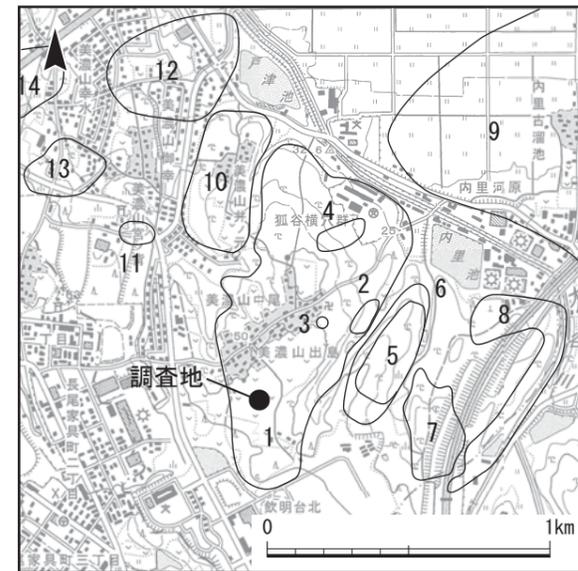


図1 調査地位置図(国土地理院 S=1/25,000 淀)

- 1. 美濃山遺跡
- 2. 美濃山横穴群
- 3. 美濃山王塚古墳
- 4. 狐谷横穴群
- 5. 美濃山廃寺
- 6. 美濃山廃寺下層遺跡
- 7. 荒坂遺跡
- 8. 女谷・荒坂横穴群
- 9. 新田遺跡
- 10. 金右衛門垣内遺跡
- 11. 宮ノ背遺跡
- 12. 幸水遺跡
- 13. 西ノ口遺跡
- 14. 備前遺跡

や甕等が出土しており、建物の廃絶時に土器を埋納したものと考えられます。

竪穴2では周壁溝が竪穴に平行して2重に巡っており、竪穴3では周壁溝が3重に巡っていることから、それぞれ1回、2回の建て替えが行われたことがわかりました。調査区西端では、2.8m×1.7mの土坑1を検出し、内部から甕・高杯・器台等が出土しました。

古墳時代 竪穴建物4基と方墳状遺構を調査しました。竪穴7は、西辺にカマドが造られていました。竪穴8の^{ゆかめん}床面では、土を焼いて作った移動式のカマドが出土しました。調査地南東では、方墳状遺構を検出しました。幅1～3mの溝が方形に巡っており、形状から一辺約9mの

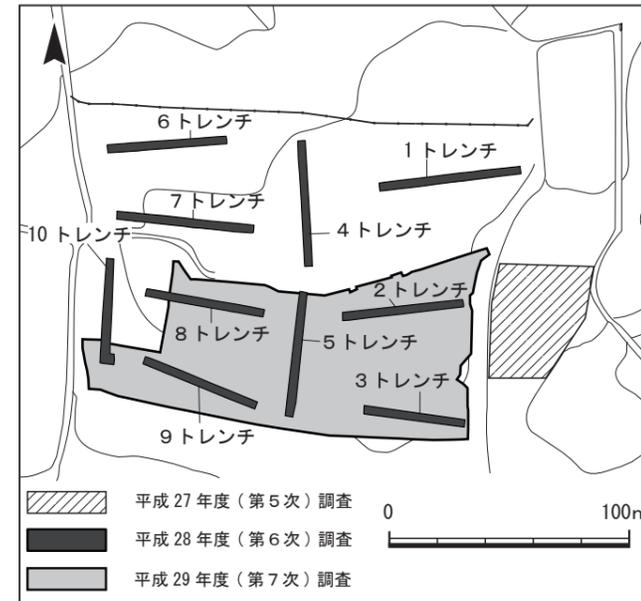


図2 トレンチ配置図

方墳と考えられます。溝の上層では土師器杯や土馬などの奈良時代の遺物が多量に出土したことから、奈良時代にマウンドが削られて溝が埋められたと考えられます。

奈良時代 掘立柱建物8棟と柵1列を検出しました。建物は、調査地北側に分布する4棟からなる一群と、南側に分布する4棟と柵1条からなる一群に分けられます。いずれも比較的小型の建物で構成されていることや、建物の方向が揃っていないことから、一般集落の宅地と考えられます。また、一辺2.5mの焼土坑1基を検出しました。土師器の破片が多数出土したことから、^{はいきどころ}廃棄土坑として利用されたようです。

その他 時期不明の焼土坑を19基検出しました。遺物の出土が無く、時期や用途はよくわかりません。ただ、2基の焼土坑からは焼土に混じって鉄の細片がわずかに出土したことから、^{かじろ}鍛冶炉(鉄原料をハンマーで叩いて製品を作るための炉)の跡と考えられます。

表1 竪穴建物規模一覧

種類	番号	平面形	規模	時期
竪穴建物	1	方形	5.5m×5.7m	弥生
	2	方形	6.4m×7m	
	3	円形	11m	
	4	多角形	7m	
	5	方形	不明	
	6	方形	4m×4m	古墳
	7	方形	4m×4.2m	
	8	方形	5m×4m以上	
	9	方形	不明	

表2 掘立柱建物規模一覧

種類	番号	建物規模
掘立柱建物	1	2間(3.2m)×2間(3.8m)
	2	2間(3.5m)×2間(3.7m)
	3	2間(4.5m)×2間(4.5m)
	4	2間(3.2m)×3間(4.4m)
	5	2間(4m)×3間(6.4m)
	6	2間(4.2m)×4間(6.8m)
	7	2間(3.4m)×3間(5.1m)
	8	2間(3.8m)×2間(3.8m)
柵	1	3間(5.1m)

3. まとめ

美濃山遺跡は、平地との比高約30mのさほど高くない丘陵上に立地した集落跡で、今回の調査で弥生時代後期の竪穴建物5基のほか、土坑などを検出しました。近隣の美濃山廃寺下層遺跡では、同時期の竪穴建物33基を調査しており、両遺跡の未調査部分を考慮すると、美濃山丘陵上の広い範囲に数多くの竪穴建物が分布していると推測されます。そして、美濃山遺跡では最大2回の建て替え、美濃山廃寺下層遺跡では最大で4基の竪穴建物が重複していたことから、両集落の住居は2～3回の建て替えがなされたと推定されるため、これらの集落は短期間で廃絶したとは考えにくい状況です。

弥生時代に稲作が行われるようになると、人々は低地の水田近くに定住するようになります。しかし、八幡市域の弥生時代後期の集落には美濃山遺跡や美濃山廃寺下層遺跡のほかに、^{みなみやま びぜん にしのくち}南山遺跡や備前遺跡、西ノ口遺跡など、丘陵上に立地する集落が多く見つかっています。

弥生時代後期には、全国の丘陵上や山の上で集落が多数見つかっています。これは、全国的にムラとムラとの抗争があったため、と考えられています。それぞれの地域に社会的・軍事的な緊張関係があったため、敵を見張ったり、敵の襲来をのろしで知らせるために小規模な集落が山の上に配置され、大規模で一般的な集落もまた、稲を作る水田とは距離を隔てるという不便さがあっても、低丘陵上に居を構えざるを得なかったと考えられています。

今回の調査では、美濃山廃寺下層遺跡と同時期の竪穴建物を確認し、美濃山丘陵上の広い範囲に集落が立地していたことがわかりました。

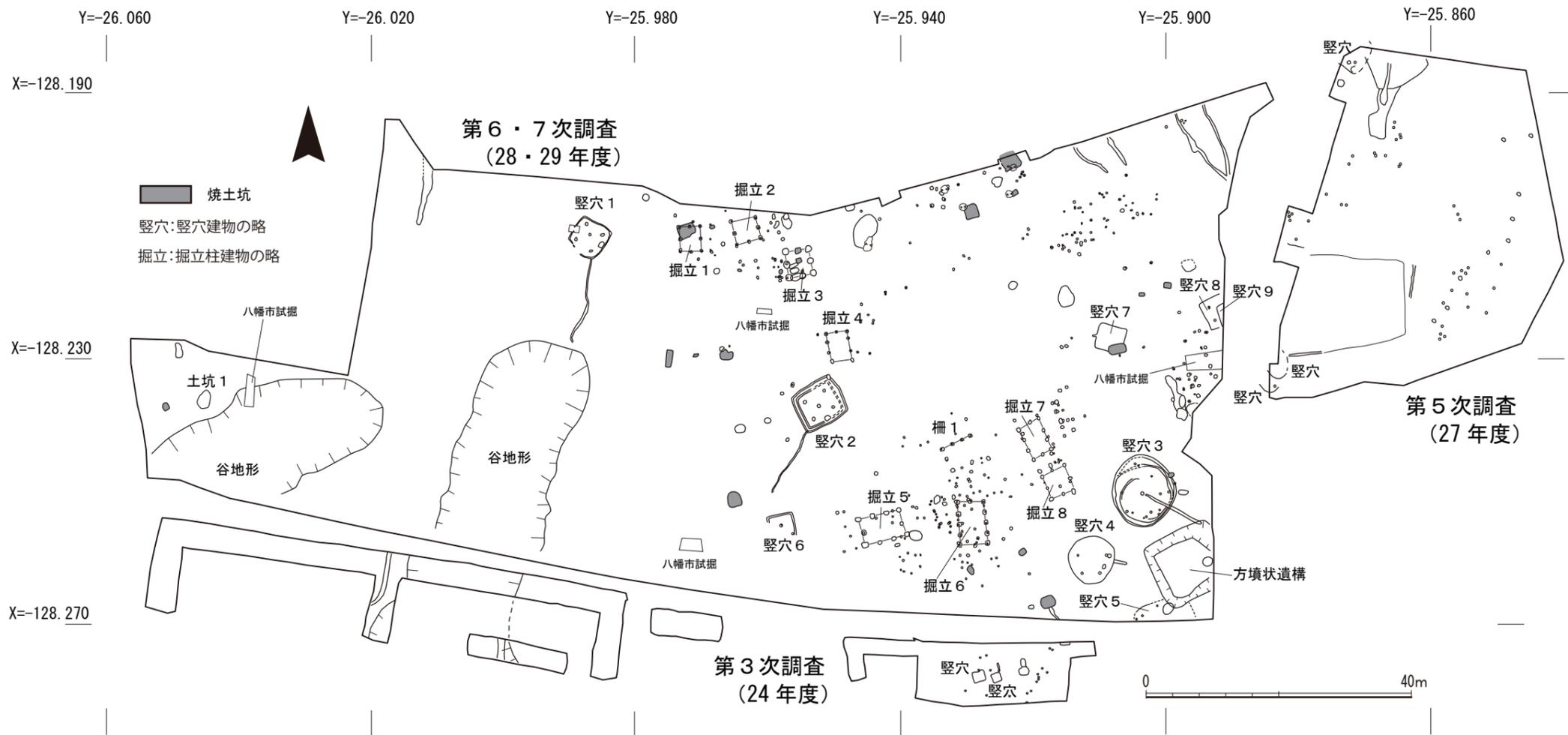


图3 美濃山遺跡 平成29年度調査区 遺構平面図 (S=1/800)



写真1 竖穴1 (北から)

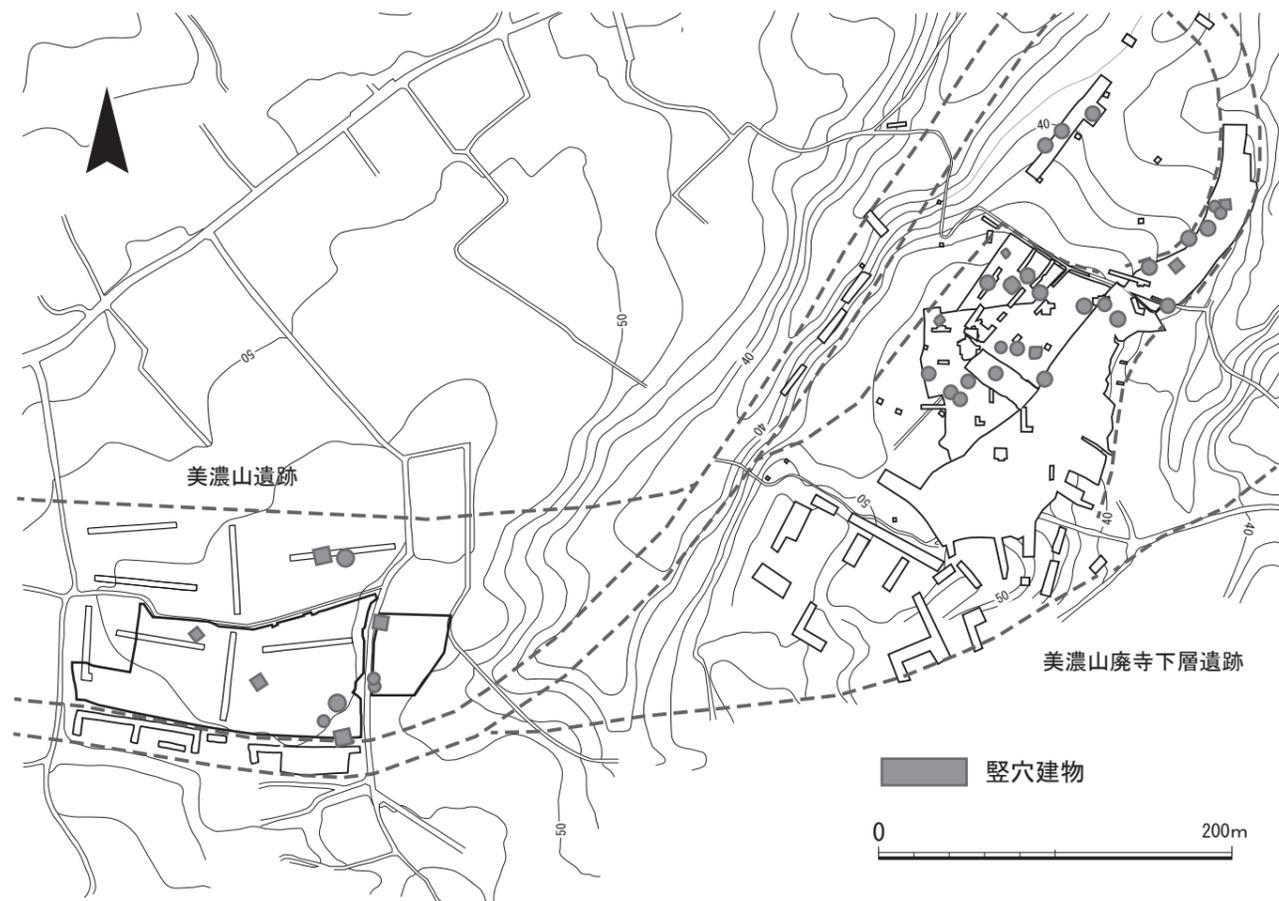


图4 美濃山遺跡・美濃山廃寺下層遺跡 弥生時代後期竖穴建物位置図 (S=1/4000)



写真2 竖穴1内柱穴出土遺物(北から)



写真3 竖穴3 (南から)

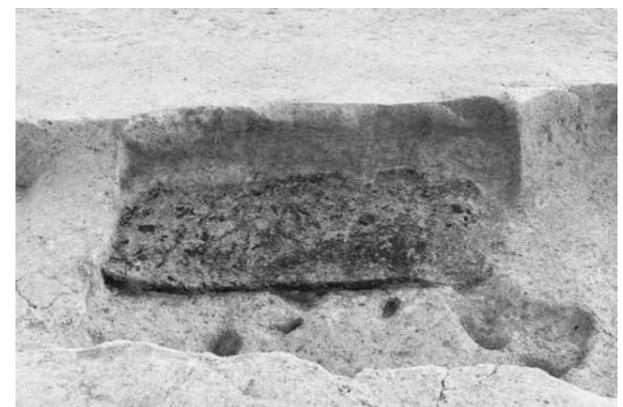


写真4 烧土坑(北から)



写真5 掘立6 (北から)